

Gundam Build Divers
GAWC
GIMM & BALL'S World Challenge

ホビコレクトクイバーズ
ジムとボールの世界に挑戦!

Episode
6

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE
ジムとボールに挑戦状!!
圧倒的な火力に苦しむふたりは、
新たな“矛”を用意する!!



冷徹さを想起させる、ひやりとしたそのささやきに、ジムは息を飲み、「あんだけの武装……残骸も残さねえ勢いでオレらをぶっ潰そうってわけか……」

そしてボールは、思わず身震いした。「なんて恐ろしく凶暴なヤツなんだ！」

いやそうではない。冒頭でも説明したとおり、ユースケはポメラニアンに吠えられただけでも……もつと言えば、ポメラニアンに顔を舐められただけでも、さらに言うならポメラニアンという言葉聞いただけでも恐怖で固まってしまうほど気が小さいのだ。

しかし皮肉なことに、その気の小ささがアタとなったしまった。

『もし戦闘中にファンネルが落とされたらどうしよう……そうだ！ シールドの裏に武器を装着すれば簡単には撃破されないぞ！』でも、もし戦闘中に弾切れを起こしたら……だったらありったけの弾を搭載すれば！』
『けど、途中で燃料が尽きてしまったら……よし！ 燃料をこれでもかかってくらい積載しよう！』近接戦闘は、相手と距離が近くなつてなんだか恥ずかしいなあ……だったら最初っから相手と距離を詰めないで戦えるような武装を装備すればバッチリだ！』
『けどけど、もしも……（以下省略）』

こうしてここに、小胆と過剰とがハイブリッドセオリーに基づき超融合した、世にも恐ろしく凶暴な容姿の、バラージュ ザ ヘッジホッグは完成した。

ちなみに蛇足かと思うが、彼のその『冷徹さを想起させるひやりとしたささやき』についてももちろん、単に自分の主張を声大に伝えるのが苦手なだけで、必要最低限のワードのみを発するクセが、コミュニケーション能力とサービスピンの欠如をうかがわせ、ひいては人間嫌い、行き着くところとして、人間など皆殺しにしてみたい残忍な性格の人物に違いない（あくまでもジムとボールの想像）……という負の連想ゲームを生みだしているだけの話だ。

しかしそんな種明かしは、ジムとボールにとっては知る由もないこと。しかも『挑戦を受けてくれたのだから、二対一のバトルでも文句は言わない』という誠実さすら、かえって余裕しくしゃくしゃと受け止められる始末。

ところが、それでも——
「ま、なんとかなるでしょ」

ジムは表情に勝利の確信を滲ませた。

「なんてったってゴールドン・ポリキャップの方が、オレ達んトコに来たって言うってんだし！（あくまでも勝手な思い込みである）」

「だよねー！（同様）」

ボールは応えると、ウィンドウに表示されているバトルスタートまでのカウントダウンに目をやった、既に一〇秒前を切っている。ひとつ息を吸い、コントロールドリッグを握りなおす。一方でジムも、スラストペダルの上でリズムカルに貧乏揺すりさせていた足をヒタと静止させた。

空気を貫く様なけたましいアラームがバトルスタートを告げると同時に、ストームプリンガーとポリポッドボールは、ユースケの弾幕ハリネズミに向かって突進した。

それから既に九分が経過していた。しかし、あるいはポリポッドボールは仕方がないとしても、GBN屈指の俊足機敏を誇るストームプリンガーですら、バラージュ ザ ヘッジホッグに有効弾を与えられる距離にまで近づくことが出来なかった。それどころかジムとボール双方共に、メインウェポンであるビーム・ライフルと180mmキャノンが破壊されている。残存している武装ではもはや、あれほどの強固な相手に為す術もない。そしてついにバトルエンドを告げるアラームが鳴り響いた。ジムとボールは完敗した。

ガンブラファミレスのボックス席で、ジムとボールは、ドリンクを注文する以外、ずっと無言だった。

まさに完膚なきまでの負けっぷりだった。一発の反撃弾も食らわせることが出来ないまま、すべてのゴールドン・ポリキャップを失ってしまった。

「なあにが、ゴールドン・ポリキャップの方からオレ達のトコに集まってきたって……だよ……」

ジムは思わず自嘲の笑みを噛みしめた。

ノズとマーキーから連絡が来たのはその時だった。コミュニケーションウィンドウが開いてジムとボールを呼び出す。二人はハッと笑顔を戻すと応答した。ウィンドウにコケティッシュなふたつの笑顔が映し出される。「ノズちゃん！ マーキーちゃん！ 顔見たかったあー！」

↕ストームプリンガーとポリポッドボールのG.H.L.-M.A.D GUNの装備形態。ストームプリンガーは両腕に2丁の計4丁を二連ビームキャノンのように備えた。一方のボールは、ロングレンジビームライフルとして頭頂部にマウントしている。

NEH 装備紹介
G.H.L.-M.A.D GUN
(Great Hyper Luxury - Multiple Armament Device)
多目的統合コンセプトウェポンモジュラー「GHL-TBA」をベースにして、ジム&ボールが新たに開発した攻防一体のマルチウェポン。ストームプリンガー、ポリポッドボールどちらのジョイントにも接続可能。戦局に応じて組み換えや増設も行えるのが特徴。

機体紹介
1



ジムは大げさに言いつつウィンドウに食らいついた。その背後からボールも「うんうんうん！」とうなずきながら覗き込む。「ついこのあいだ約束を破ってしまったばかりなのに、先日も急にうかがえなくなってしまうって……本当にごめんさい」
「……今度は、シメ鯖にあたってしまうって……」
ノズとマーキーは、相手にモノ言うスキを与えない謝り顔で、黒目がちな大きな瞳をウルウルさせながら、

「失礼をしてばかりいるのになんかお願いをするなんて、厚かましいことだっていうのはわかってる、けれど……もしまだ気が変わっていないから、こんどこそゴールドン・ポリキャップのこと、詳しく教えてもらえない……かな……」
「………実物、手に取って見てみたい……」
「そのことなだけど……」
情けなげに肩を落として見せるジムとボールに、ノズとマーキーはようやく彼らの様子がおかしいと気づいた。

「どうかしたの？」
「うん、実は——」
ジムとボールは、ユースケに——バラージュ ザ ヘッジホッグとのバトルに完敗し、ゴールドン・ポリキャップを失ってしまったことを詳細にカミングアウトした。

「じゃあ——」
ウィンドウの中のノズの表情からふと、愛想が消えた。
「もうあなたたちは、ゴールドン・ポリキャップを持っていないってわけね」
「そう、超ショック、お願いだから慰めてよお——」

「コミュニケーションウィンドウが、交信を切断され消失した。」
ユースケは、ジムとボールとの勝負に勝利し手に入れた四つと、輝きの中で自身の拳が握っていた一つ、あわせて五つのゴールドン・ポリキャップを手のひらに乗せ、眺めた。

ふと思った。
このゴールドン・ポリキャップは、確かに自分にとって、勝者の証のメダルのように思えた。現に新たな四つも、その持ち主とのバトルに勝利し勝ち得たモノだ。しかし、今日剣をまじえた彼らは、決して自分をおびや

かす様な強者には思えなかった。
どうして彼らはこれまで、四つもの勝者の証のメダルを——ゴールデ
ン・ポリキャップを手に出れたのだろうか。

母と妹たちと自分、計8人の所帯としては決して広くない——むしろ
ぎゅうぎゅう詰めのアパートメントの自室、兼ダイニング、兼リビング、
兼寝室で、ボールは床に寝そべり、ネットニュースのまとめサイトを読む
ともなしに眺めている。そんな彼のタブレットを小学生×2名は脇から覗
き込み、シャワーからあがったばかりでバスタオル姿の中学生×2名は、
椅子の代わりにボールの背中に座ってドライヤーで髪を乾かし、制服のま
まバイトから帰った高校生×2名は、そこらにバッグを投げ置くと、一刻
も早く楽になりたいと開放的なルームウェアに着替えながら、
「なに？ お兄ちゃん今日もGBNに行かなかったの？」
「つい先週まで毎日入り浸ってたのに、あたしらと全然遊んでくれない
で」

「っーか」中学生×2名も参戦してくる。「こうして家にいたトコで別に
遊んでくれてないけど」

「ねー、何があったの？」

ボールは答えない。

「教えるよ」

尻に敷いているボールの上で、ぼいんぼいん跳ねる、それでも黙ったま
ま。

「見ればいつのまにか小学生×2名がタブレットの画面を、大好きなアニ
メ『プリんキュワリン』の動画に変えている。それにも気づいているの
かないのか……」

そこへ、キッチンから母×1名が、夕食を運んでくる。

「ほらほら晩ごはんの準備手伝って。今日のメニューはみんな大好き、エ
ア・蟹チャーハンよ」

「またエアかよ……」

ボールは思わずうんざりと、

「僕がエア・ガンプラバトルで稼いだ賞金、まだいっぱい余ってるだろ？」

たまにはそれでこいつらに本物の蟹チャーハン、食わせてやればいい
じゃん、高級中華屋とか行ってさ、エアなんかの何百倍も美味いヤツ」

「ムうぎゅうちゅうか!？」



機体紹介
2

フルアーマーガンダム ~パラジュザ ハッジホック~

ユースケが制作した、ファンネル、ビーム・ライフル、ロケットランチャーなど完全無欠砲撃型モビルスーツ。副題は“弾幕ハリネズミ”の意味で、その圧倒的な火力は敵機を瞬時に無にしてしまうほど。シールドにはフィルターも装備されている。



「日鷹屋!？」

目を輝かせプリんキュワリンから顔を上げる小学生×2名に、母親×
1は肩をすくめて見せると、

「たしかに高級中華屋さんの本物蟹チャーハンには勝てないかもしれない
わね、けれど……母さんのエア・蟹チャーハンは、マズい?」

「おいしい!」

妹×5が声を揃えた。加えて、皆を代表して高校生×1が、

「そりゃそうよ、だってお母さんの料理にはお母さんの全力の気持ちがかこ
もってんだもん。そんなの、勝ちとか負けとかじゃないんじゃない?」

妹×5が皆でうなずき、母×1が「ありがとう」とほっこり微笑む。

ボールはハツとした。

彼は母のエア・蟹チャーハンがどんな料理より好きだった。

壁一面に開いた窓外に、星空を見上げ摩天楼を見下ろす高層アパートメ
ントの最上階のリビングで、ヴィオラは、

「ガンプラバトルに負けた?」

と、ジムが告げた言葉を反芻した。

「そしたらなんか、いろんなモン一気に無くなってさ……」

そう言うジムは、ヴィオラお手製のひとくちガトーショコラを摘まん
だ。

「いろんなモンって?」

「ま、その……いろんなモンは、いろんなモン」

「ふうん」

ヴィオラも摘まむと、半分に折って、口に放り込む。

「そしたらもう、GBNはいいかなーって気持ちになっちゃって」

「負けたから、はいお終いつてわけ?」

ヴィオラは口もとにガトーショコラのカセラがついているのも構わず、
クルクルした目で一生懸命にジムの覗みつけた。

「ふざけんな」

「……え?」

「じゃあなに? わたしはその程度のきまぐれな遊びのおかげで、人生の
なかでもっとも大切な瞬間を引き延ばしにされてきたってワケ?」

ヴィオラの言葉にジムは思わずガトーショコラを飲み込んだ……その
時、ジムのモバイルギアフォンが鳴った。

ディブレイを見れば、電話を掛けてきたのは、
「……ボール……」
なんだか予感したが、ジムは慌てて電話を取った。
「どうした?」そう告げようとするより先に、ボールの声が飛びこんでき
た。
「勝ったか負けたかは関係ない……僕たちはガンプラが大好きだ! それ
が大事なんだ!」
ジムは「!」となった。
そんなボールの声が聞こえたのかどうかはわからない……たぶん聞こえ
ていなかっただろう。それでもヴィオラはジムの歩み寄ると、
「ぎっと、勝ったか負けたかじゃないよ……あなた自身がやりきったと思
えるかどうか、それが大切なんじゃない?」
ジムは暫くの間、ヴィオラを見つめた。そして、
「ちょっと出てくる!」
駆けだそうとした。
「ジム!」
ヴィオラの声を止め、振り返る。
「……待ってるから」
微笑むヴィオラの口もとには、ガトーショコラのカセラがついたままだ。
一週間ぶりにジムと再会したボールの第一声は、
「早くアトリエに行こう!」
余計な言葉は必要なかった。その一言だけでジムの気持ちのエンジンも
一気にフルブーストまで全開になった。
「なに? ガンプラの改造?」
「って言うか……前にほら、例のキュベレイと一緒にいた百式が持ってた
じゃん、馬鹿みたいに精度が高くてパワーあるスナイパー・ライフル!」
「おお、あったな!」
「アレのモジュラーベースのシルエット、ずっとどっかで見たとあるな
……って思ってたんだ! やっと正体に気づいた!」

ユースケは、目前に開いたメッセージウィンドウの内容に小さく驚い



勝ったか負けたかは関係ない……
僕たちはガンプラが大好きだ!
それが大事なんだ!

そしたらもう、
GBNはいいかなーって
気持ちになっちゃって





た。そして、
「このガンプラバトルの行方で、ゴールデン・ポリキャップの真の持ち主が、明かされるのかもしれない……」
彼はその挑戦を、快く受けることにした。

ジムとポールは、先に敗北したのと同じラグランジュ・ポイント・ディメンションをリベンジマッチの場所に指定した。

彼方から、輝く星々を背後に、鋼造りのハリネズミ——パラージュザヘッジホッグが、こちらを見据えている。

ジムとポールのコクピットに、ユースケの声が届いた。
「ゴールデン・ポリキャップは渡せない」
「そういや、全部あんたに持たてられてたんだっけ」
ジムはあっけらかんと返した。

「すっかり忘れてた」
ポールの言葉に偽りはない。

そんな二人の愛機には、いま、新たないかづちが与えられている。
その名は、

G.H.L.M.A.D.GUN

(Great Hyper Luxury - Multiple Armament Device (マルチ兵装デバイス)-GUN)

以前、シモダがジムとポールに与えてくれた、多目的統合コンセプトウェポンモジューラー『G.H.L.T.B.A』(EPISODE2を参照)をベースに二人がビルドした、戦局によって基本デバイスを中心に様々な形態に組み換え/増設が可能な攻防一体のマルチウェポン。

「しかし、あの百式が装備してたバケモンみてえなスナイパー・ライフルのベースが、例のキューベレイがシモダのフォースネストの倉庫からぶん捕ったって、G.H.L.T.B.Aだったなんて、よく気づいたな」
「エア・ガンブラの癖で、細かいディテール記憶するのは得意なんだ。にしても——」

ポールは、『G.H.L.M.A.D.GUN』の名付け親であるジムに、

「Multiple Armament Device (マルチ兵装デバイス)のUNってのは解るけど……」

「助かったぜポール！」

「にしても！ 近接武装を持たないヤツの懐に入れば楽勝だと思ったのに、あと一歩ってトコで遮られるなんて！」

「ああ！ あいつ……なんて凄えガンブラだ！」

沸き上がった想いはもはや感激か感動か……その一方で、ユースケも、

「俺のパラージュザヘッジホッグの重武装をいかくぐって、あそこまで接近するとは……なんと素晴らしいガンブラ……なんと素晴らしい二人！」

盾と矛ではない。矛と矛、力と力のぶつかり合い。いつしか激しくせめ

「その部分は、オレのフィアンセが——」

言いかけたジムが、慌てて咳払いでごまかす。

「で、こっちのGreat Hyper LuxuryのG.H.L.M.A.D.GUN」

「なんか、いい感じじゃね？」

「わかんないけど……ジムっぽい！」

ウィンドウに表示されているカウントダウンが0になる、バトルスタートのアラームがけたたましく鳴り響いた。

「んじゃ、レッツ・パーティーと行きますか！」

宣言と同時にジムは、ストームプリンガーの両腕のウェポンラッチに大型二連ビームキャノン形態で装備しているG.H.L.M.A.D.計四門を、ユースケのパラージュザヘッジホッグに向けて一斉にぶっ放すと、突進した。

ユースケは咄嗟に右肩のシールドに装備してあるフィールドを展開し、受け止めようとした。ところがストームプリンガーの攻撃は、フィールドの壁をこじ開け突破し、シールドを粉碎した。

「なんなんだ……この出力は！」

驚くユースケに思案する暇も与えず、今度はポールのポリポッドボールが、頭頂部のウェポンベイにロングレンジビームライフル形態で装着しているG.H.L.M.A.D.を発砲する。

ユースケは再び、左肩のフィールド・シールドで防ごうとするも、右肩同様にシールドが破壊される。

そんなパラージュザヘッジホッグに、ストームプリンガーが急接近し、発砲！

「せせん！」

パラージュザヘッジホッグは、反射的に四機のシールドファンネルを展開すると、迫り来るビームに向かってビームを発射、命中させて相殺した。

「なにー！」

次いで驚くジムに向かってランチャーからミサイルを連射。追い立てられる様に回避するストームプリンガーの進行方向に、更にシールドを発砲する。

「誘い込まれた？」

ジムが息を飲んだその時、放たれたレルガンに、今度はポリポッドボールが放ったG.H.L.M.A.D.が命中、二つの力が相殺し合い消失する。

ぎ合い相殺し合う、エネルギーの火球と化したバトルフィールドの中で、ジムは、ポールは、ユースケは、勝ち負けを忘れ、ただ、自分が持つべきを出し切るうと魂を爆発させていた……大切なこの時間に、決して悔いを残さないよう。

そして、その時はやって来た。

懐に入ろうとするストームプリンガーの侵攻を懸命に阻止し続けるパラージュザヘッジホッグの周囲には、プロペラントを使い尽くし、デッドウェイトと化したシールドファンネルが放棄され漂っていた。気づけばその四枚が集まりひとつの大きな壁になっている。ユースケはいったんその壁に身を隠し、態勢を整えようと近づいた——その時、シールドの

◀NEW 装備「G.H.L.M.A.D. GUN」によって火力が増したストームプリンガー&ポリポッドボール。フルアーマー・ガンダムは火力に対抗するだけの出力を得て、不利な戦況を一気に変えたのだった。

GUNDAM BUILD DIVERS GIMM & BALL'S WORLD CHALLENGE

エア・ガンブラの癖で
細かいディテール
記憶するのは得意なんだ



影に身を隠していたポリポッドボールが飛び出し現れ、遂にバラージュザ、ヘッジホッグの懐に入り込むと、その胸もとにG・H・L・M・A・Dを突きつけた。

ニヤリとボールが笑い、「よしっ！」とジムが拳を握る。そして……驚いていたユースケが「やられた」とばかりに頭を掻いたのと同時に、双方のコクピットに、バトル終了のアラームが鳴り響いた。

バトルを終えた三人は、付近のコロニーに降り立った。ストームプリンガーとポリポッドボールが、バラージュザ、ヘッジホッグと向かい合い立っている。機体からジムとボールが降機した。

ユースケは躊躇した。その生真面目さゆえ、彼のアバターは限りなく自分の容姿に近くつくられていた。

最高のガンブラバトルだった、彼らも、彼らのガンブラも、けれど——もし、強面でいかつい自分の容姿を見たら、ひよっとしたら……。

ユースケは意を決し降機した。緊張で強面がよけいにこわはる。それでも真っ直ぐにジムとボールを見据えた。

ジムとボールもユースケを見据えた。

「最高だよ！ あんたも！ あんたのガンブラも！」

ジムは飛びこむようにユースケに駆け寄った。

「ホント！ このスジボリなんかめっちゃくちゃ凄い！ こんどテクニク教えてよ！」

ボールは興味津々とバラージュザ、ヘッジホッグを見上げた。

「そうだ、これだ、だからGBNは、素晴らしい……。」

「あのさ……。」

ふと、ジムがバツ悪そうに、

「さつきは、ゴールデン・ポリキャップのことなんて忘れてた、なあんて言ったけど……やっぱ、返して貰っていい……かな？」

隣でボールも身を小さくしている。

ユースケはハッとなった。

「そのことなんだが……。」

彼もまた、申し訳なさそうに、身を小さくして——二人に、告白した。

「えええーっ！」

ジムとボールは、驚愕に目を見開き、

「全部、謎のキュベレイと百式に持ってかれただっってえ!？」



次回予告!

こりやまたデカイ! デカイぞ!
NEW兵器を携えたジム&ボールの
真価がここに発揮される!

次回 NEXT
Episode
7